

メアリ・リンドン・シャンリー著『フェミニズム、  
結婚、ヴィクトリア期イングランドの法』6

Mary Lyndon Shanley, *Feminism, Marriage and the Law in Victorian England* (Princeton: Princeton University Press, rep. 1993), pp. 50-54.

ジェンダーの学際的研究班  
苑原俊明、田村真弓、山口志保

既婚女性財産制度についての改革推進者の理念と活動

既婚女性の財産制度に関する運動は、1860年代後半における女性の権利擁護にかかる他の団体にルーツを持っていた。それらの団体の一つがエミリー・デイヴィスの創設したケンジントン協会で、1865年から翌年にかけての冬に、ロンドン近郊で会合した際の地名にちなんで名づけられた。デイヴィスの意図は、「共通の問題について関心を持ち一定レベル以上の思慮深さと知性を有する者で、相互に交流する機会にそれほど恵まれていなかった人々」<sup>2</sup>を糾合することにあった。ケンジントン協会は女性の社会、教育および経済面での向上に関心をもつさまざまな団体に属する女性を束ねたものであった。そうした人々には、バーバラ・リー・スミス・ボディション、ジェシー・ブーシェレットおよびフランシス・パワー・コップなどの、1856年に既婚女性財産法案の請願書を起草し『イングリッシュ・ウーマンズ・ジャーナル』誌を刊行し、女性雇用促進協会の結成に関わったランガム・プレイス・サークルに属する人々や、エリザベス・ウォルステンホームのような女性の教育に関与した人々、さらにジョン・スチュアート・ミルの継娘のヘレン・テイラーなど彼を取り巻く人々がいた<sup>3</sup>。【以上翻訳：苑原俊明】

1865年11月、ケンジントン協会は「国政への参政権を女性にまで拡大することは望ましいだろうか。もしそうなら、どのような条件下にすべきか」という問題について議論した。白熱した議論の後、投票が行われ、その場に参加した大多数が何らかの女性参政権を支持す

<sup>2</sup> "Family Chronicle," 423, Davies Papers, Worzala, "The Langham Place Circle," 283 頁において引用された。

<sup>3</sup> Worzala, "The Langham Place Circle," 283-84.

るといふ結果が示された。バーバラ・リー・スミス・ボディション（彼女は1859年にアルジェリア在住の内科医であるユージーン・ボディションと結婚していた）は、すぐにでも投票権獲得運動を組織したがったが、その運動が女子教育のために活動している人々の努力を損なうことになる、というエミリー・デイヴィスの警告によって、思い留まることになった<sup>4</sup>。しかし、1866年の春に、議会在最終的に1867年の第二次選挙法改正法となる法案についての審議を始めると、ボディションは我慢できなかった。この法案は、都市選挙区に住む世帯主（すなわち、農業に従事する日雇い労働者を除く、事実上、全てのイングランド人男性）へと参政権を拡大するものだった。ジョン・スチュアート・ミルは1865年に議員に選ばれていて、1868年まで議員を務めたが、彼が選出されたことで、フェミニストたちは（政治的に強力ではなかったけれども）大いに尊敬される代弁者を庶民院に得ることになった。1866年5月の一月をかけて、ボディションと数人の仲間たちは女性参政権を求める請願に1,499の署名を集めた<sup>5</sup>。ミルは1866年6月7日に、その請願を庶民院に提出した。それに続く冬、マンチェスター、ロンドン、そしてエディンバラで、女性参政権委員会が組織された<sup>6</sup>。

1867年は、フェミニストたちの中で、とりわけマンチェスター・サークルにおいて、活動が活発化した年だった。マンチェスター・サークルでは、参政権問題を取り上げただけでなく、既婚女性財産法の成立に推進力を提供することになったのである。1865年に組織された女性参政権獲得のためのマンチェスターのある協会は短命だったが、そのメンバーは参政権獲得を請願する署名を集め、その請願書をジョン・スチュアート・ミルが提出した。1867年1月11日、マンチェスター女性参政権協会が、ジェイコブ・ブライト、S・A・スタインタール牧師、エリザベス・グロイン夫人、マックス・キルマン、エリザベス・ウォルステンホーム、そしてルイス・ボルシャート医師によって再結成された<sup>7</sup>。リディア・ベッカーとリチャード・パンクハーストが主要なメンバーとなった2月に、マンチェスター参政権協会は拡張された<sup>8</sup>。

既婚女性財産法成立のための運動は、このマンチェスター（あるいは、より正確には、北

---

<sup>4</sup> Ibid., 284-86.

<sup>5</sup> 1866年5月9日、ボディションは、ヘレン・テイラーに手紙を書き、請願運動を始めたいという要望を表明した。そして、テイラーとミルはどんな文言が適切で的を射ていると思うかをテイラーに尋ねた。テイラーは、少なくとも署名が100あればミルは議会在に請願を提出するつもりだろう、なぜなら、それより署名が少なれば馬鹿げて見えるし、役に立つどころか、害になるだろう、と答えた。Barbara L. S. Bodichon to Helen Taylor, 9 May 1866, John Stuart Mill - Harriet Taylor Mill Collection, British Library of Political and Economic Science (BLPES) 参照。

<sup>6</sup> Helen Blackburn, *Women's Suffrage: A Record of the Women's Suffrage Movement in the British Isles with Biographical Sketches of Miss Becker* (London: Williams & Norgate, 1902), 58-59, 63-65.

部イングランド)のフェミニストたちのサークルに起源を持ち、そのメンバーはマンチェスター女性参政権協会と女性の高等教育のために尽力していた人々の両方から集められた<sup>9</sup>。【以上翻訳：田村真弓】 既婚女性財産法案を通過させるための運動の基礎固めは、エリザベス・ウォルステンホーム、エリザベス・グロイン、ロンドンのジェシー・ブーシェレットと、リヴァプールのジョセフィン・バトラーが行った。ウォルステンホームはマンチェスター近郊の女子寄宿学校の校長、グロインはマンチェスター女性教員会議の会長だった。ブーシェレットはランガム・プレイス・サークルのメンバーで、1859年に女性雇用促進協会を設立していた。バトラーは、リヴァプール学院学長のジョージ・バトラー牧師夫人で、女子教育運動だけでなく娼婦救済運動に深く携わった。1867年秋に、ウォルステンホーム、グロイン、バトラー、そしてリヴァプールの人達で北部イングランド女性高等教育推進評議会を設立していた<sup>10</sup>。彼女たちは、1868年にマンチェスターの急進的な法律家リチャード・

<sup>7</sup> Blackburn, *Women's Suffrage*, 59. 1865年以来存在していた、というマンチェスター参政権協会の主張（それ故イギリス最古の参政権協会になるはずだという主張は、ロンドン協会によって異議を唱えられた）は、Constance Rover, *Women's Suffrage and Party Politics in Britain 1866-1914* (London: Routledge & Kegan Paul, 1962), 6 n. 1. で論じられている。

ジェイコブ・ブライトは、マンチェスター選出の急進派議員で、バーミンガム選出の議員、ジョン・ブライトの弟だった。ジェイコブは、女性の権利拡大のための一連の広範な法案を確固たる態度で擁護した人物で、議会における女性の最も力強い支援者の一人だった。彼の妻、アーシュラ・メラ・ブライトは、1876年から1882年まで、既婚女性財産法委員会の会計係を務めた。S・A・スタインタール牧師は、社会科学協会の評議員を務め、マンチェスター地区の多くの社会問題に関与した。その中には、労働者のための機械工協会を設立することも含まれた。エリザベス・グロイン夫人は、マンチェスター女性教員会議の会長であり、北部イングランド女性高等教育促進評議会の創設メンバーだった。マックス・キルマンとその妻は、共に、初期の参政権運動に関与した。エリザベス・ウォルステンホームは、コングルトンの小規模な女子寄宿学校の校長で、1865年に学校調査委員会の前で証言した9人の女性のうちの一人だった。ルイス・ボルシャート医師については、これ以上の情報を見つけられなかった。

<sup>8</sup> リディア・ベッカーは、1866年10月の社会科学協会の会合で、バーバラ・ボディションの女性参政権に関する発表を聞いたことにより女性の権利への興味を掻き立てられ、残りの人生を参政権運動に捧げた。1870年、ベッカーは、『ウィメンズ・サフリッジ・ジャーナル』誌を創刊し、1890年に亡くなるまで編者を務めた。彼女は1870年にマンチェスター教育委員会の委員に選出されたが、その年選出された4人の女性のうちの一人であり（それは、女性が投票し、委員となる資格を得た最初の年だった）、亡くなるまで委員を務めた。リチャード・マースデン・パンクハーストは、1868年の既婚女性財産法案、女性の世帯主に自治体の選挙に投票する権利を与えた1869年地方自治選挙権法の改正、1870年の女性無資格撤廃法案（女性参政権法案）を起草した。

<sup>9</sup> 1867年1月3日から3月30日の間にロンドンのエミリー・デイヴィスからマンチェスターのリディア・ベッカーに宛てて書かれた17通の手紙のコレクションからは、マンチェスター女性参政権委員会が形成される際に、濃密なレベルの議論と活動があったことがうかがえる (Manchester Society for Women's Suffrage Collection, Manchester Central Library)。

<sup>10</sup> 北部イングランド女性高等教育推進評議会は、以下のことを通して、女性の状況を改善することを目指していた。それは、オックスフォードとケンブリッジの地方試験（エミリー・デイヴィスやバーバラ・ボディションの尽力で既に女子に対して開かれていた）を広めることや、大学教員が行ういくつもの女性向けの出張講座を進めることや、ケンブリッジ大学に女性向けの特別な高等地方試験を確立するように促すことであった（高等地方試験については、男女平等教育という考えへの支援を失いかねないと懸念したデイヴィスには受け入れがたかった）。北部イングランド女性高等教育推進評議会のメンバーは、高等地方試験受験準備のためにケンブリッジに女子寮を建てる活動もした。この女子寮は現在のニューナム・カレッジの前身である。

パンクハーストに既婚女性財産法草案作成を依頼した<sup>11</sup>。

1868年3月21日から11月29日までのリディア・ベッカーによる書状からは、ベッカー、ウォルステンホーム、バトラー、そしてパンクハーストの間で定期的に手紙の交換や訪問がなされていたことがわかるだけでなく、女性参政権、既婚女性財産そして教育に関する彼女たちの活動がどれほど分かちがたいものであったかも読み取れる。6月8日にベッカーはウォルステンホームに、既婚女性財産法委員会規約に用いようとした文言が、あまりに女性参政権協会の規約の文言に似ているので変えるようにと助言した。「女性参政権運動の多くの反対者の共感を得たいと思っておられる」のだから、新しい文言が特に望ましいでしょう、とあった。7月10日のベッカーからウォルステンホームへの別の手紙では、女性参政権集会と既婚女性財産権集会を結びつけずに、どちらかの分科会を前後に組み合わせて開催するようにと注意していた。そうすれば、女性参政権はあまりに急進的だと考える人にも既婚女性財産権活動に参加してもらうことができるからだった<sup>12</sup>。

ベッカーからジョセフィン・バトラーへの長く心のこもった手紙は、バトラーに政治的事業の目的のためには娼婦のための人道主義的作業を止めるようにと強く呼びかけており、政治的フェミニズムの再開に関わる北イングランド女子高等教育推進協議会の女性達の特質や優先事項が垣間見られることに惹きつけられる。

あなたの努力が、困難な人達へのあなたの深い共感から始まっていて、本質的に高貴で賞賛に値しながらも、一時しのぎにしかならないことにこんなにも向けられているのはとても勿体ないと思います。今あなたは、持てる資産と力を傾けて、僅かな燃えさしを火中からすくい上げようとしているのです。それよりもその火を消す方に努力を向けてください!!!【以上翻訳：山口志保】

---

<sup>11</sup> 既婚女性財産法委員会 (MWPC) の最後の『報告書』では、同委員会は1850年代の「先駆者の努力を知らずに」活動をしたとあり、このことはバトラー、グロインそしてウォルステンホームにおそらくあてはまった。しかしブーシェレットは確かに先駆者の努力を知っていたようだ。エリザベス・ウォルステンホーム・エルミーが同『報告書』を書いた可能性がかなり高く、そこに既婚女性財産法委員会成立に関する彼女の記憶が反映されていたものと思われる。Married Women's Property Committee, *Final Report*, 18 November 1882 (Manchester: A. Ireland, 1882), 12 参照。

<sup>12</sup> Lydia Becker to Elizabeth Wolstenholme, 8 June 1868 and 10 July 1868, Manchester Society for Women's Suffrage, Manchester Central Library.